

アイス

くき

○△小学校の登校日である8月10日は真夏日だった。憎らしい程に照りつける太陽、それを遮ってくれる雲ひとつ見当たらない青空、シャワシャワシャワと辺り一帯に響き渡る蝉の鳴き声。道沿いに流れる川の水量も、普段より明らかに少なくなっている。

その熱射の中を、学校帰りの5人の小学生が歩いていた。服装はまちまちだが、皆一様に黄色い帽子をかぶり、黒のランドセルを背負い、学校の名前が刻まれたお揃いの大振りな日傘を差していた。一人の男子が時おり傘の外に手足を出し、自分の蛮勇さを慌てふためく同級生に見せつけていた。その慌てるさまを見ることが目的だったのか、彼は満足そうに笑いながら道を駆けて行った。

ふと、その小学生があるものを見つけて立ち止まり、その顔からは笑みが消えた。友人たちが追いつくと、彼は振り返り青くなった顔を浮かべながら叫んだ。

「やべえ、人が溶けてる！」

マジかよ、と友人たちは言いながら彼の後ろを覗き込んだ。そこには、肌色と赤のマーブル模様を描いた液体と固体の間のような物体があった。衣類はその物体に取り込まれており、その物体の周りにはカバンやその中身が散乱していた。

「うわマジで溶けてるよ」「なんで傘差してなかったんだよ」「アレじゃね？ポケテて昔の習慣のまま何も差さずに出かけちゃってってヤツ。この前テレビでやってた」「うちのかあちゃんもじいちゃんがそうならないかって心配してた」「うちのひいばあちゃんはコレだったんだって。俺生まれる前だけだ」

友人たちが口々に言葉を発するのを遮って、その物体を発見した彼が言った。「そんなことよりも早く急冷車呼ばなきゃ！多分まだ大丈夫だから」そういうと彼は自分の傘と友達一人の傘を借りて、これ以上その物体に日差しが当たらないよう日陰を作った。二人はそれぞれ別の友達の傘に入れてもらっていた。携帯電話を持っていた友人が急冷車を呼ぶ傍らで、先程まではしゃいでいた彼は神妙な面持ちで友達に話しかけていた。

「ホントに溶けるんだな...俺初めてみたよ」

「僕は隣のおじいちゃんがこれで死んじゃってたから二回目かな...急冷が間に合わなかったんだって。半分くらいどっか行っちゃってて」

「この人、大丈夫かな...」

「多分...まだそんな蒸発してないみたいだし、ドロツとしてるし」

5分ほど経って急冷車が到着した。中から防護服を着た隊員が二人出てきて、一人が発見した小学生に発見時の状況を訊いていた。もう一人は、傘を畳んでわきに置くと手早く両手に持っていた巨大なちり取りのような板をその物体に添え、手元にあるスイッチを押して板を前にスライドさせてその物体を綺麗に回収し、そのまま急冷車へと搬入していた。状況を訊いていた隊員はその場にあった荷物を回収し、小学生達にお礼を言うと急冷車に乗り込み車を発進させた。自分の傘を手に取り差した彼は、先ほどと変わらぬ日差しの下でぼそりと呟いた。

「やっぱり、夏の太陽は怖いな...」